GM 鶴牧-3 環の会

第 11 回クラシックを楽しむ会

2014 年 6 月 15 日（日）18:30～21:30

歌劇「椿姫」（ヴェルディ）

ネトレプコの挑発的な視線と迫真の演技

会場等：ザルツブルク音楽祭 2005（2005.8.7）
　　オーストリア、ザルツブルク祝祭大劇場
楽団等：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
　　ウィーン国立歌劇場合唱団
指揮　：カルロ・リッツィ
演出　：ウィリー・デッカー
出演　：アンナ・ネトレプコ（ヴィオレッタ）
　　ロランド・ビリャソン（アルフレード）
　　トマス・ハンプソン（ジョルジョ・ジェルモン）
　　その他

あらすじ

高級娼婦ヴィオレッタと青年貴族アルフレードの純愛物語。誇り高きヴィオレッタが純情で一途なアルフレードの愛を受け入れる。アルフレードの父ジェルモンが現れ、彼の娘のためにアルフレードと別れるよう懇願、ヴィオレッタは泣く泣く犠牲を承諾する。娼婦にもどったヴィオレッタに対して事情を知らないアルフレードは怒りと嫉妬に狂う。胸の病が悪化し死の床についているヴィオレッタに、アルフレードは許しを求め、ジェルモンは罪の大きさを後悔。

公演

ザルツブルク音楽祭 2005 の注目はマリア・カラス以来のヴィオレッタという評判のアンナ・ネトレプコ。人気が人気を呼び、初日のチケットは 22～45 ユーロが 1,500～2,500 ユーロ!?に高騰（まことしやかなデマが流された影響も?）

当日 ORF(オーストリア国営放送)は生中継で TV 放送し、祝祭大劇場に近いレジデンツ広場には大スクリーンを設置してこの公演を映し出した。

ヴィオレッタ以外は女性も全て黒の男装

演出

前年の 2004 年にザルツブルク音楽祭にデビューしたウィリー・デッカー（1950-）の演出は、舞台の装飾を極限まで単純化、人物の位置や役割も再構築して人の感情の流れを音楽のように表現。カルロ・リッツィ（1960-）指揮のウィーン･フィルの素晴らしい演奏と相まって作品の価値を高めた。

なお、2010 年大晦日のメトロポリタンもザルツブルク音楽祭 2005 と全く同じ演出の舞台で話題になった。

超シンプルな舞台、時計は命の残り時間

第 12 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**歌劇「フィガロの結婚」（モーツアルト）**

7 月 21 日（月）18 時開場、18 時 30 分上映開始

グラインドボーン音楽祭 1994 ハイティンク指揮、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団

名花ルネ・フレミング他豪華キャストの舞台をお楽しみに

8 月以降、メルビッシュ音楽祭の「ウィーン堅気」等を予定。

アンナ・ネプレプコ(1971-)

ネトレプコ（2013）

ロシア南部クラスノダール生まれでクバーニ・コサックの子孫。

ソ連崩壊直前の大混乱の中、名門サンクトペテルブルク音楽院声楽を学びながら、向かいのマリインスキー劇場で掃除婦をしていた。後にマリインスキー劇場のオーディションを受けた時、審査員達が「あの掃除婦だ！」。巨匠ワレリー・ゲルギエフ指導の下、22 歳でマリインスキー劇場デビューを果たした。「フィガロの結婚」のスザンナ役。

ロシアとオーストリアの市民権を持ち、2013 年からニューヨークのハドソン川を見下ろす部屋に一人息子と妹と住んでいる。

なお、世界で 10 億人が視聴した今年 2 月のソチ・オリンピック開会式でネトレプコがオリンピック賛歌を歌い上げたことはまだ記憶に新しい。

ロランド・ビリャソン(1972-)

ダムラウの息子をあやすビリャソン（2011）

オーストリア人を先祖に持つフランス系メキシコ人でメキシコ・シティ生まれ。フランスの市民権を取得している。

ザルツブルク音楽祭 2005 の「椿姫」でネトレプコと共演して一躍世界的なテノール歌手と評判になり、その後も度々共演している。

右の写真の赤ちゃんは、2011 年 6 月のメトロポリタン来日公演で、ソプラノ歌手ディアナ・ダムラウ※が連れてきた生後 8 か月の息子。この公演で出演を予定していたネトレプコは福島の原発の影響を心配して急遽出演を取りやめた。恐ろしいチェルノブイリを経験したから。

※第 6 回楽しむ会（昨年 12 月）の歌劇「魔笛」で「夜の女王」を歌った。

トマス・ハンプソン(1955-)

ハンプソン（2012）

米国インディアナ州エルクハート生まれ。現代を代表するバリトンのひとり。1985 年からチューリッヒ歌劇場でモーツァルトのオペラなどを歌い、次第に国際的に注目を集める。その後 1986 年にメトロポリタン・デビュー、1988 年にはザルツブルク音楽祭に出演、オペラ歌手として世界的に活躍。一方、屈指のリート歌手としても知られており、とりわけシューベルトやマーラーの歌曲は高く評価されている。

各地のコサックが活躍したウクライナとロシア南部

（黄色の地名はネトレプコ記事参照）

あらすじと名曲

【時と場所】 。

1850 年頃のパリとその郊外

【第 1 幕】ヴィオレッタの家のサロン

社交界の名士が集まり華やかな宴が開かれる。この宴にやって来た田舎の青年貴族アルフレードは、求めに応じてヴィオレッタの美しさを讃え、皆と一緒に**「乾杯の歌」**を歌う。彼は以前からヴィオレッタに恋をしていて、二人きりになると彼女に愛を告白する。（ヴィオレッタとの二重唱**「思い出の日から」**）

ヴィオレッタは娼婦である自分は本当の恋愛などに縁はないと思いながらもアルフレードの純粋な愛に葛藤、アリア**「ああ、そは彼の人か～花より花へ」**を歌う。

【第 2 幕】第 1 場　パリ郊外の二人が住む家

ヴィオレッタは社交界を離れ、パリ郊外の家でアルフレードと愛の生活を送る。アルフレードはアリア**「燃える心を」**でその幸福と喜びを歌う。

ある日、アルフレードの留守中に、彼の父ジェルモンが訪ねてくる。ジェルモンは、ヴィオレッタの娼婦という過去が、娘（つまりアルフレードの妹）の縁談に差し障るため、息子と別れるようヴィオレッタに迫まる。ヴィオレッタは自分の真実の愛を必死で訴えて断るが、ついに説得され「哀れな女が犠牲になり死んでいった伝えてください」と泣く泣く承知する。

別れの置き手紙を読んだ何も知らないアルフレードは、彼女が裏切ったと誤解して激怒。再びジェルモンが現れ、アルフレードを正気に返らせるため、アリア**「プロヴァンスの海と陸」**を歌って故郷へ連れて帰ろうとする。しかしアルフレードは復讐心に燃え、ヴィオレッタを追いかけてパリへ行く。

【第 2 幕】第 2 場　パリ、高級娼婦フローラの家のサロン

ヴィオレッタはパリの社交界に戻り、かつてパトロンだったドゥフォール男爵に手を引かれて現れる。彼女を追ってきていたアルフレードは、ヴィオレッタが男爵を愛していると苦しまぎれに言うのを聞いて逆上。彼は大勢の人前で彼女をひどく侮辱して悲しませる。

【第 3 幕】 パリ、ヴィオレッタの家の寝室

第二幕から２ヶ月が経ち、ヴィオレッタの胸の病は重く死の床についている。ヴィオレッタはジェルモンから届いた手紙を読み始める。約束を守ってくれた感謝、アルフレードが決闘で男爵を負傷させた後、外国へ旅立っていたこと、真実を知った息子が謝罪にいくだろう。ヴィオレッタは「もう遅すぎる」と嘆きアリア**「さようなら、過ぎ去った日よ」**を歌う。

間もなくアルフレードが駆けつけてきて許しを求め、二人で再会を喜び二重唱**「パリを離れて」**を歌う。ジェルモンも到着し、ヴィオレッタを娘として迎えるために来たと言うが、ヴィオレッタのやつれた姿に罪の大きさを後悔する。

ヴィオレッタは「アルフレードがつつましく清らかな女性と出会って結婚するなら、ぜひ自分の絵姿を渡し、天上であなた方の幸せを祈っている者からだと伝えて欲しい」とアリア**「もしもつつましい乙女が」**を歌い息を引き取る。

【名曲】

第 1 幕と第 3 幕の前に演奏される二つの**「前奏曲」**は単独でも演奏される名曲である。

第 1 幕の**「乾杯の歌」**、第 2 幕ジェルモンのアリア**「プロヴァンスの海と陸」**が特に有名。

上記に記載した、第 1 幕と第 3 幕のヴィオレッタのアリア、第 2 幕のアルフレードとジェルモンのアリア、各幕で歌われる二重唱などもみな名曲である。

第 2 幕第 2 場冒頭の「俺たちはマドリードの闘牛士」など歌と踊りも楽しい。